

アラインの「Pet B to B Net」で回収量可視化

まずは栃木、茨城の店舗で回収、全国展開も視野

プラスチック資源の適正循環を目指して

(88)

ペットボトルの水平リサイクルへウエルシアHDの取り組み

全国でドラッグストアチェーンを展開するウエルシアホールディングスは、SDGs、ESG経営の一環として、ペットボトルを店頭に設置した回収ボックスで回収し、再びペットボトルに戻す水平リサイクル「ボトルtoボトル(BtoB)リサイクル」の取り組みを本格化させている。事業推進に当たっては、同プロジェクトの発案かつ運営管理会社であるアライン(東京都千代田区)が運営管理のツールとして独自に開発した「Pet B to B Net」で店舗ごとの回収量をリアルタイムで可視化している。まずはコカ・コーラボトラーズジャパンと連携し、栃木県、茨城県で展開。その後は同業他社や飲料業界とも協力して、取り組みを全国に拡大していきたい考えた。

(黒石修)

ウエルシアHDは近年、バイオマス原料を配合したレジ袋の有料化など石油由来プラスチックの使用量削減をはじめとした、SDGs、ESGへの取り組みを拡大・強化してきた。同社の倉持宗一(社会環境推進担当部長)は、「大量のペットボ

トル製品を販売しているドラッグストアも、責任を持ってペットボトルのリサイクルに携わるべきと考え、100%の再資源化を可能とするBtoBの仕組みづくりを検討してきた」と話す。こうしたことから、全国にある店舗網を活用し

て使用済みペットボトルの店頭回収・リサイクルに、回収・再資源化に知見を持つコカ・コーラボトラーズジャパンと連携して取り組みことを決めた。まずは2020年9

月から、栃木県小山市のウエルシア11店舗に回収ボックスを設置し、回収されたペットボトルをジャパンテック宇都宮工場など協業産業グループの工場で再原料化し、再びペットボトルに戻す実証を実施。回収されるペットボトルの品質がBtoBに充分適すること

を確認できたことから、翌21年6月から本格展開として栃木県内の53店舗に回収ボックスを設置した。ウエルシアは小山にある物流センターと53店舗間の静脈物流を活用し、自らのコスト負担で店舗で回収されたペット

ボトルを小山センターに集約する。

ペットボトルの店頭回収は、一部のコンビニエンスストア等で行われているが、ドラッグストアが店舗に回収ボックスを設置し自らの静脈物流を活用して行うケースは国内初となった。さらに今月からは、茨城県内の113店舗に回収ボックスを設置して、同様の取り組みを始める。

同事業の運営管理は、ウエルシア全店の廃棄物一元管理を手掛ける廃棄物管理会社のアラインが行っている。同社は同事業の運営管理のツールとして、「Pet B to B Net」を開発・運営している。これは、店頭で回収されたペットボトルから再生ペットボトルになるまで(ボトル・ベール・フレック・ペレット・アプリフォーム)の原料

の重量(重量)をフローごとに可視化し、ウェブ上で閲覧できるシステム。同システムにより、ウエルシアの店舗ごとの回収量をリアルタイムで可視化でき、資源物を有価取引する際の数値(重量)を関係者で共有することができ。

アラインの遠藤正浩社長は、「BtoBリサイクルの課題は、年間ペットボトル消費量の半数に当たる約30万tを占める事業系(店頭回収、自販機横、店舗・オフィス)をいかに低コストで回収・リサイクルするかだ。低コスト化の力を握るの

は、回収されたボトルの物流効率率が向上しさらに低コストでのBtoBが可能になる」と倉持氏は話す。アラインと連携して運営管理ツールを有効活用しながら、「特定の企業とのタイアップのみでなく、ドラッグストアや、飲料メーカー業界とのコラボレーションも視野に入れ、飲料業界が目標に掲げるリサイクル率達成に貢献できれば」と考えた。

は、「良質なボトルを集めることと、回収したものの運送コストをどう抑えるかがポイントで、後者を当社自らが負担すべきと考え、静脈物流を活用した」とする。プラスチック問題として先に取り組んだレジ袋有料化の売上と同様に、同事業で顧客から回収されたペットボトルの資源売却で得られた資金は、全額福祉団体に寄付する。



栃木県、茨城県の店舗にボックスを設置して回収を実施

回収ボックスの上にはB to Bリサイクルのイメージを掲示



回収ボックスの上にはB to Bリサイクルのイメージを掲示

回収ボックスの上にはB to Bリサイクルのイメージを掲示